

冬木の芽

山田真砂年

賑やかに産着干されり小鳥来る
煌々と夜を灯せり茸飯
冬黄葉オンコロコロと鴉鳴く
戻れば平家の色や冬紅葉
餅を搗く前に一口臼の米
餅搗きの音に巧拙ありにけり
よそ者のどすんごとんと餅を搗く
阿夫利嶺も金時山も冬うらら
菰卷ける松のいささか気恥づかし
冬の夜のスキートレインてふ酒場
風の中りうりうとして葱の列
冬菊の黄の燦々と目の当たり
ひと抱へほどの落葉の袋かな
段葛けぶらせてをる冬木の芽
冬草の囲む礎石に腰おろす
枯蓮の地軸のごとし少しななめ
冬青空卒塔婆に似てスカイツリー
誕生日湯冷めするほど星眺め
火事の跡見に行き酔うて帰りきし
ふくと汗風が研ぎ出す星の数
雪嶺の見ゆる街なり閑かなり
コンビニへ枯葉が吾の先に行く
森閑か枯葉のごとく小鳥舞ふ
笹鳴きの辺り藪濃き暗さかな
冬草や高みより落つ鳥の糞